

北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

R&V 42号

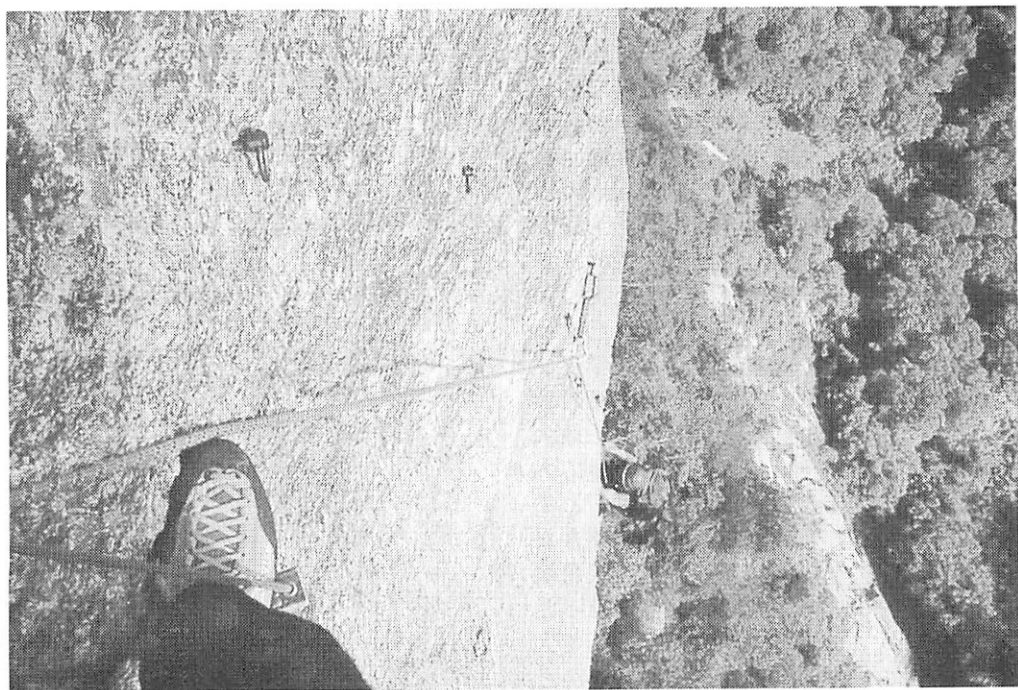
2001年7月~9月



ACC-J 茨城

目指せヒマラヤ!!

ROCK AND VALLEY 2001 秋 No42



穂高岳屏風岩東稜を登るクライマー（高桑信一）

《Photo by Kimura》

雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録
アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン・茨城

山の歌 今昔

『♪穂高よ～さらば～また来る日まで～♪』この歌をはじめて聞いたのは、会社の先輩に連れられて夏休みに初めて穂高岳に登った帰りのバスの中でした。当時は山登りに興味を持ち始め、自前のキスリングを得意げに背負って粋がっていた頃ですが、この歌は新鮮な歌に聞こえました。その後ACC-Jに入会して穂高の涸沢での定着合宿や鹿島槍ヶ岳のベースキャンプ等で沢山の山の歌を教わりました。当時は夜になりアルコールが入るとあちこちの天幕から歌声が聞こえて来ましたが、その中でも一際大きな声の歌声がACC-Jの天幕のような気がしました。特に水島さんの声はよく通る声で自慢の喉を惜しげもなく披露していた記憶があります。当時は皆若かったので恥かしくもなく大声で放歌し、宴を楽しみましたが、その先頭で騒いでいたのは当時からアルコール中毒だった名雪さん・大浦さんだったと記憶しています。大浦さんは元全共闘のメンバーとかで、酔った勢いで涸沢でアジ演説をして罵声を浴びせられていたような気がします。名雪さんは日本大学ワングル部出身なので日大ワングル部の歌を聞かせてくれました。かつては法政大学山岳部の【エーデルワイス】・慶応大学山岳部の【守れ権現】等々それぞれの部歌があり、よく歌っているのを聞きました。しかし今は昔と違って山の天幕場で山の歌を聞く機会がめっきり減ったような気がします、その一因として大学山岳部の衰退があるのではないかと推測します。また山の歌の歌詞が今の時代には合わなくなっているのも事実です。『♪行こうか戻ろか南稜テラス～♪戻りゃ俺いらの男がすたる～♪行けばあの娘が涙を流す♪山の男はつらいもの～♪』とはその最たるもの、今の娘はその位で涙など流すものですか!! さらに今の男の子は辛かったら山など

登るものですかってんだ!!とは言っても寂しいものがあります。また山男(山女)はロマンチストが多く、今聞いても素晴らしい歌詞もあります。『♪山々はひとつの別世界～♪地球の一部と言うよりも～♪並外れ～独立した神秘的の王国で～♪その王国に冒険を試みる為の～♪唯一の武器は～♪意思と～愛情とテクニクなのさ～♪』愛情とテクニクがあればその他の分野でも冒険がしたいものですネ。その反面いいかげんな歌詞もあり今もって意味が不明なものがあります。『♪剣～山の～♪ふ～もと～の～♪黒部～の～な～が～れ～♪ク～ジ～ラが泳ぐ～♪……………オーハニヤッサ♪オーハニヤッサ♪あ～るはナイナイよ～♪ナイナイよ～♪』大浦さんの得意歌でしたが、当時はいいかげんに歌っているのばかりと思っていましたが、歌集でその歌を見つけた時にはビックリしました。いまこの原稿を書きながら山の歌の歌集を見ているが、懐かしい歌が沢山出てきました。〔剣の歌〕〔北岳の歌〕〔岳人の歌〕〔谷川小唄〕〔北穂小唄〕〔新人哀歌〕等々。数年前の5月に東北の岩木山・八甲田・八幡平と山スキー三昧を楽しんだ最後の晩に八幡平の天幕の中で、周りに誰も居ないのを幸いに手拍子とコッヘルを箸で叩き音頭を取り、ACC-J東京のメンバー吉田さんの指導で数十曲を全員で熱唱して酔いつぶれた記憶が蘇ってきました。吉田さんも山の歌を沢山覚えていてテントの中で良く教わりました。そうそう!!忘れてならないのが金ちゃんです。彼はギターの弾き語りをするほどのミュージシャンなので彼が歌うと周りが静かになった位の喉の持ち主でした。なに!!木村の名前がでてこないって?。彼は歌はからつきしダメ。ただ大きな声で怒鳴るのみ、歌と言える代物じゃないヨ聞かないほういい。

木村 一

《目 次》

2001年 秋号 7月～9月 ACC-J 茨城

巻頭言	(木村) 1
目次	 2
集会報告	 3
山行報告	 4
谷川岳一ノ倉沢衝立岩ダイレクトカンテ	(吉田) 5
御神楽岳前ヶ岳南壁	(菊地) 6
只見恋ノ岐沢	(渡辺) 7
錫杖岳前衛フェース	(本図) 8～10
前川大滝沢	(名雪) 11～13
南ア甲斐駒ヶ岳赤石沢奥壁Aフランケ赤蜘蛛ルート	(本図) 14
南ア甲斐駒ヶ岳赤石沢奥壁A中央稜	(吉田) 15～16
北ア剣岳チンネ左稜線	(笹平) 17
北ア剣岳八ツ峰六峰Cフェース剣綾会ルート	(渡辺) 18
北ア剣岳八ツ峰六峰Dフェース富山大ルート	(渡辺) 19
クドレ沢左又～つづら岩 岩トレ	(渡辺) 19
北ア穂高岳屏風岩東稜	(木村) 20～22
川内山塊 杉川	(笹平) 22～23
北ア唐沢岳幕岩大凹角ルート	(本図) 24～26
&広島ルート (ハングのみ)	
友好山岳団体の月報・会報・その他	 27～28
編集後記	(木村) 29

表紙……北ア唐沢岳幕岩の大ハングのリードする渡辺

《Photo by Motozu》



集会報告

〔於 土浦 Gusto〕

.....〔7 月〕.....

7月4日

出席者 本図、木村、菊地、鯉河、吉田、渡辺、笹平、大須賀

7月18日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、笹平、遠藤

.....〔8 月〕.....

8月1日

出席者 本図、木村、菊地、渡辺、笹平、大須賀

8月22日

出席者 本図、木村、菊地、遠藤、渡辺、笹平

.....〔9 月〕.....

9月5日

出席者 本図、木村、菊地、渡辺、笹平、鯉河、大須賀、坂本

9月19日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、笹平、松井



山行報告

《2002年7月～9月》

..... [7 月]

7月1日	御岩山岩トレ	L木村、遠藤、大須賀、
7月15日	谷川岳一ノ倉沢衝立岩 ダイレクトカンテ	L笹平、吉田、渡辺
7月15日	御神楽岳前ヶ岳南壁	L本図、菊地、大須賀、
7月20日～7月23日	只見恋ノ岐川	L笹平、渡辺、遠藤、松原
7月20日～7月21日	錫杖岳前衛フェース 1ルンゼ本流ルート 北沢フェース	L本図、吉田 L本図、吉田
7月29日	吾妻 前川大滝沢	L本図、木村、名雪、渡辺、大須賀

..... [8 月]

8月12日～8月16日	甲斐駒ヶ岳赤石沢奥壁 Aフランヶ赤蜘蛛ルート 奥壁中央稜	L本図、吉田 L本図、吉田
8月12日～8月16日	剣岳チンネ左稜線 中央チムニー 北條ルート 六峰Cフェース 六峰Dフェース	L笹平、遠藤、渡辺、名雪 L笹平、遠藤、渡辺、名雪 L笹平、遠藤、渡辺、名雪 L笹平、遠藤、渡辺、名雪 L笹平、遠藤、渡辺
8月25日	クドレ沢左俣～つづら岩	L本図、渡辺

..... [9 月]

9月7日～9月9日	穂高岳屏風岩東稜	L本図、木村、名雪、松原、高桑 (浦和浪漫)
9月22日～9月24日	川内山塊杉川	L笹平、名雪、仲川
9月22日～9月24日	北ア唐沢岳幕岩 大凹角ルート	L本図、渡辺

谷川岳 一ノ倉沢衝立岩ダイレクトカンテ

2001. 7. 15

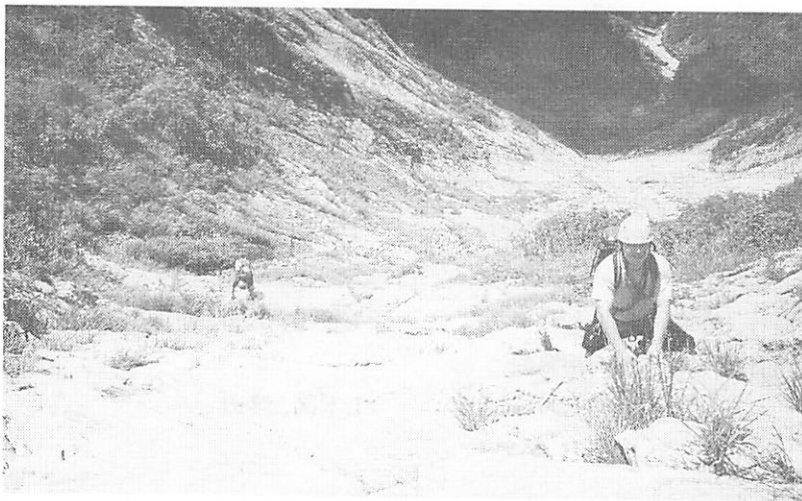
パーティー L 笹平孝、渡辺聡子、吉田 仁

はじめて一ノ倉出合から衝立を見た時「あ〜、一生行かなくてもいいかな〜」なんて思ったもんだけど、一年たったら「あ〜、登ってみたいな〜」に変わりました。心境の変化です！駐車場を出発する時も別段、緊張しなかったしね。これは、神経の変化です！それにしても暑かった。テールリッジを登りきる頃には、アロハがグッチョリ！それを絞っていると見覚えのある顔が上がって来た。たてつづけに北鎌、三つ峠で会った人たちだ。

「よく会いますねえ〜、あなた達も好きですねえ〜」だって！おまえらもな！まあ、そんな心温まる交流を踏まえながら、ロープ結んで、取っ付きに向かったのでありました。奥壁の方から落石の音が聞こえます。中央稜からは、とっても気合いの入った声が聞こえます。風流よのお〜。さあ一僕達も

がんばりましょう！1ピッチ目はフリーで、イケイケです。2ピッチ目からは、いよいよエイド！もう人工は、慣れだからなんて、いい訳は、通用しません。もう、それなりにやってきてんだからさ。オールフリーで、行ったって、10の後半から11の前半でしょ！行けるとこまで行っちゃおうかなあ〜なんて思ったけど、おもいきり背伸びしながらボルト追いかけてしまいました。カンテの乗っこしに難儀してると、下から「がんばってえ〜」て声援が！見ると例の連中だ。ほっとけ！そしてラストのフリーのトラバースをチョーク使用で無難にこなして（別に必要ないけど、気分で登ってますから）無事終了。今にもスコールの来そうな中をスプーンカットの雪渓に翻弄されながら、速攻下山。おつかれさまでした！

（吉田 記）



前ヶ岳南壁を登る
大須賀。菊地

御神楽岳前ヶ岳南壁

2001. 7. 15

パーティ L 本図一統、大須賀伸男、菊地光夫

暑苦しい夜ではあるが、車の中はエアコンが効いているので快適である。途中尾瀬に行くという木村夫妻とすれ違うが、恐妻家の木村氏は時々カミさんのご機嫌を伺っているとの事。ウチも見習わなくちゃ!! 東北道から磐越道を快適に飛ばし、会津坂下インターで高速を降りて金山町方面へと向かう。ダムサイトの所から林道に入り車を走らす、ここまで来ると、茨城はあれほど暑かったがこの辺まで来るとエアコンは必要ない位だ。更に奥深く林道を進み、御神楽岳への登山道がある駐車場に車を止めて一発、いや一杯やって熟睡モードに入る。翌朝、御神楽岳への登山道を約1時間位歩き、小さな枝沢の所より霧来沢の本流に入溪。霧来沢を詰めて行くと大きな雪溪が現れてきたが、シュルンドになっている所を早足で通過するが雪溪から垂れて来る雫が雨のように降ってくる。周りは初夏でムシ暑いがここだけは別世界である。冷気が噴出しており快適と言うより寒い感じである。大きなシュルンドを抜けて今度は雪溪の上に上がり、雪溪を上部まで詰めるがこの辺より高度感が感じられるようになる。今回は靴を3足持ってきているので、雪溪が切れた所で溪流シューズから2番目の靴フラットソールのクライミングシューズに履

き替える。傾斜がちょっと急なのでザイルを使用してスラブを快適に登る。この辺のスラブは幅も広く、どこからでも登れそうな感じである。我々のパーティーは第2スラブに入って行っていたが、最初はザイルを使用しないでノーザイルで上へ上へと高度を稼ぐ。更に登ると若干傾斜が落ちた所でアンザイレンして大須賀君がトップでザイルを伸ばす。しかし、途中にランニングの支点が取れないので注意深く登る必要がある。ここを登ると再びノーザイルで稜線近くまでスラブ登攀を楽しむ出来る。天気も良く、高度感もあり快適なスラブ登攀であった。登攀終了後3番目の運動靴に履き替えてブッシュ混じりの不明な所を強引に上へ上へと詰める。左側正面に御神楽岳が見える所から下降開始。この辺は登山道がないが、以前に大須賀君が登っているので迷う事なくスムーズに通過。小さな沢に出てそれを上へと詰めると登山道の途中にある非難小屋に出た。ここからは気楽に登山道を下り車に戻り、帰路温泉入浴。

(菊地 記)

奥只見恋ノ岐川

2001. 7. 20 ~ 7. 23

パーティ L 笹平 孝、遠藤和彦、渡辺聡子、松原丈夫 (ACC-J 東京)

恋の岐川は遡行終了点が平が岳山頂であること、美溪であるらしいこと、5つ星の沢であること、そしてなにより名前が美しい！ということからぜひ行ってみたかった沢だった。しかし登はんの魅力は皆無なので、「岩魚釣り放題でせ！」と誘ってみると笹平さん、遠藤さん、松原さんがご一緒してくれることになった。ネットでの他クラブの報告を見ると「つれた」という記述もある一方、「全然いなかった」というものもあったのでそれ以降私は頼むからつれてくれ〜とひたすら念じる日々を過ごすこととなる。さて前日、出発が遅くなったこともあり恋の岐橋に到着したのは午前2時を回っていた。テントを張ってさあ寝ようと思っていたら、「さあ一杯やりましょう」という声がかかる。はあ？と思っていたら私以外の3人は飲む気十分であった。そんな3人を車に残し、私はとっととテントでシュラフによこになったのであった。

朝、橋の方を見ているとさすがに人気の沢だけあってぞくぞくと入溪していく。釣れなかったらどうしようと心臓ばくばくで、「これだけ人が入ったらもしかしたら釣れないかもしれないですね。」と出発前から妙に弁解をしだすわたしであった。沢はますますきれいで、難しいところもなく順調に進み、松原さんが「そろそろ釣りながら歩いてもいい

かな。」という声をきっかけにテン場を探しつつ、釜では竿を出しつつ歩く。オホコ沢の手前、大滝の上に手頃な場所があったので定法にのっとりホテルの建設、火の確保をし、みんなは狩りに出かけた。わたしは火のそばで釣れますようにとひたすら祈っていた。祈りが通じたのかその晩はたき火の回りをいわなで囲むことができたのであった。私がほんとと胸をなでおろしたのは言うまでもなからう。

朝ご飯の準備をしようとしていると早朝釣りにでていった松原さんがたくさんのいわなとともに戻ってきた。とりあえず焼いてしましましょう、ということとなり出発は10時ちょっと前になってしまった。2日目も沢は悪いところもなく、一カ所あった雪溪は下をダッシュでくぐり抜け、50mの滝も難なく通過した。最後のつめの草付きが濡れて滑りそうで非常に怖かったが、3時ごろ無事に終了点の姫の池に到着し、水場の近くにホテルを設置した後みんなでたまご石なるものを見に行くことにした。このたまご石は本図御大が「あれば絶対見に行った方がいい！あれはすごいぜ！」と集会でのたまわっていたものである。ひとしきり見物した後はホテルに戻って酒飲みとなった。ところで、この平ヶ岳のテン場は大にぎわいでみなさん立派なテン

トや豪華な食料を持ち上げている。私たちはといえば”ホテル”と聞こえはいいが、なんの事はない単なるタープ1枚のみでほっぽどみすぼらしくみえたのだろう、「これで寝るんですか」「これで大丈夫なんですか」などと何人にも聞かれたのであった。

さて最終日、みんなで平ヶ岳の頂上を往復した後、どろどろぐちゃぐちゃとし

た登山道を延々と下った。覚悟はしていたがこの登山道はとても長く、道路についたときにはへろへろになっていた。ここから車のある恋の岐橋まで10km!泣きそうだったが、ここからが自他共に認めるナンパ師、松原さんの独壇場で、やってくる車に次々と声をかけ、橋までの足をゲットしたのであった。

(渡辺 記)

錫杖岳前衛フェース

2001. 7.20 ~ 7.21

パーティ L本図一統、吉田 仁

20日。まだ眠い目をこすりながら駐車場を出発。勝手知ったる幕营地までのアプローチは焦らずゆっくり歩く。錫杖沢出合のいい場所はすでに一杯で、かといって全装を背負って岩小屋まで登る元気はないし、まずまずの所で我慢する。今日は人気ルートの1ルンゼを登ろう。左方カンテの取付広場から右にバンドを行くと1ルンゼ取付である。予想通り何パーティも順番待ちをしていた。本当はもっと下から取り付けばさらに充実するのだろうが、先行パーティがいるとラクが怖い。

吉田リードで登攀開始。だが、今この原稿を書いているのは半年後。最近頃に忘れっぽくなったこの頭は、そのほとんどを忘れてしまっている。なにを書いてよいかわからない。ただ、俺も2回くらいリードしたかなってことくらい微かに覚えている。思い出せることといった

ら、1ルンゼといっても、いわゆる私たちがイメージするルンゼ登攀とちがって、フェース登攀といってよいほど幅のある壁を登る。1ピッチ登る事に待ち時間がある、くたびれたような記憶もある。人気ルートだけあって支点はしっかりしていた。右手に見えるV字岩壁は悪相で登る人は稀であろうと感じた。そうそう、下降ルートは右俣沢にとった。P3からP2を右から巻き、烏帽子岩を左から巻いてクライムダウンしていくのだが、少々いやらしい所もある。吉田がなかなか降りて来ないので、大きな声で呼んだりしたが返事もなく心配になってきた。登り返そうかなと考え始めたら降りてきた。途中、懸垂をしたとのことだった。烏帽子岩は興味ある岩峰で今度来たときは登ってみたい。私はこの岩峰のように、どこから登るにしても、岩登りをしなければ

ばならないピークが好きだ。

20代に欧州アルプスに行った理由の一つに、岩登りをしないと登れないピークに登りたいというのがあった。日本では登攀を終えて頂上に出ると、ハイキングコースから来たジっちゃんバっちゃんたちで溢れかえり、あれでは感激も半減してしまう。ベースではこんなことがあった。まずは完登祝いをと、先刻から冷やしておいたビールを吉田が取りにいった。まもなくショボクした顔して戻ってきた。ビールがなくなってしまったと言うのだ。そんなバカなあ！再び探しに行く。それを見ていた近くのテントの女性がやってきて「すみません、間違って飲んでしまいました」と言いながら別のビールを持ってきたのである。銘柄は違うけどしょうがない、一件落着とした。おねーさん気をつけてよねー。まあ酒無し晩餐にならなくて良かった。

21日。北沢フェースに行く。取付に行くとするで先行パーティがいた。しかたない、寝坊したのだから。このルートは途中からつるべで登ったと記憶している。先行は人工があまり上手ではなく、スピードが遅い。「急ぐ必要がないからゆっくり楽しんで登ろうぜ」なんて我々に聞こえるように言っているが、それは速く登れる人が言うセリフで、もともと速く登れない人の言葉ではないんじゃないの？俺たちに対する単なる「言い訳」にすぎないんじゃないの？「ん？なに？俺は今日中に茨城まで帰るんだよ」と口から出かかったが止めた。フォローが回収できなかったヌンチャクだかな

んだかを回収してやったような記憶もある。私はクライマーを見ただけで「これはできるな」とか「だめだろうな」とか、ある程度はわかる。もちろん外れることもあるけど。以前柔道をしていたときは、組んだだけで相手の強さが予想できた。組んだとき「これは俺より強い」と感じた相手に勝てたためしが無い。先行パーティは、あれが彼らのスピードであったのは、見ていてすぐに分かることなのである。文献によると、北沢フェースは支点の腐食が激しいとのことだったが、頭の中で描いていたほどのことではなく、古いルートならばしかたのない程度の腐食であろう。リングが痩せ細って、あと2〜3年かなと思われるボルトも何本かはあったが、5.11とかのフリークライミングをするならとても耐えられない支点はある。人工としては難しいところはなく比較的快適であった。下降ルートは、昨日の右俣沢は吉田が絶対にイヤだと言うので、左方カンテをツペルことにした。登ってくるパーティをやり過ごしてから下降開始。7〜8回の懸垂で取付に降り立った。私も吉田も明日まで休みなのだが、吉田には悪いが下山する。明日は我町の祇園祭なのでどうしても帰りたい。私の住む柿岡という所は、一世帯一人は祭りに出る義務があるのだ。当家では子供達が帰郷しているので義務は果たせるが、それより私自身祭りが大好きで、年一回はみこしや山車で大騒ぎをしたいのだ。これはいくつになっても治らないらし

い。祭り好きというのは私に限ったことではなく、近所の男衆は皆そうである。昔は祭りという男だけのものだったが、最近では女性の進出もすごくて、胸に晒しをキリリと巻いて、胸の小さい人はズレ落ちるんじゃないかとの男性群の心配（期待？）を尻目に、血気盛んである。私は、思い出深い槍見温泉に浸かっていくことにした。あのン年前の正月のときのような良いことは全然なく、水着のばあさんとガキばかりでさっさと上がる。吉田は近くのボルダーで遊んできたようだ。さあ茨城に向かうとするか。とんだ山行報告になりました。頭

の中は空っぽですので、余計なことをたくさん書いて字数を増やしました。なにとぞこれでお許しくださいませ。

7月20日

槍見温泉(6:12)ーBC(8:10)ー取付(9:35)ー終了ーBC(17:48)

7月21日

BC(6:21)ー取付(7:40)ー終了(13:37)ーBC(15:50)ー槍見温泉(18:09)

(本図 記)



錫丈岳前衛フェース1ルンゼ登攀中の吉田

前川 大滝沢

2001. 7. 29

パーティー L本図一統、木村 一、渡辺聡子、大須賀伸男、名雪博二
(ACC-J東京)

下館に集合のつもりが下館のお祭りがあるので、筑波山麓の明野町役場となった、私は木村邸に20時ぐらいに着くようにとのことなので家を17時に出発谷田部に19:40時に着く。夕飯を吉野屋の牛丼並400円(これは吉野屋が牛丼並280円を全国展開する前夜の正規の値段、いわば今世紀最後の記念すべき並400円である)に生卵50円をつけた豪華な物とした。木村邸から明野まで何やら細いまっすぐのいつもの下館に向かう道を進むと、やがて右側に明野町役場が出てくる。もう20:30時も過ぎているというのに、小さな町の大敷地にある役場は明かりが煌々と着いていて、未だに何かこの時間になっても仕事をしている風である、広い駐車場をよく見るとカンバンが立っていて何と明日選挙があるとのことでありここに止めるわけには行かない、と思われた、他に車を止めておく場所を探して車で付近を走り回って1~2カ所見付けて還ると、そこえ明野町役場利用常習者の本図氏が現れて役場の裏にも駐車場があり、あっさりと簡単に解決してしまった、さすがに常習犯、手際の良さに思わず尊敬してしまう。集合場所については、近頃は木村邸、つくば市役

所、下館市役所、明野町役場、川越合同庁舎、千駄ヶ谷駅、川越屠場、川口保健所、春日部地方庁舎と色々あるが、今この乗り継ぎ場所としての駐車場のことが話題になっている、話題と言うよりも問題視されて来ている。その典型的なのが和光市にある東京外郭環状線の下新倉パーキングエリアである、ここは平日も含め週末になると特に早朝から車が集まり広い駐車場がたちまち一杯になってしまう、ここが集合場所となり何台かで集まった人が1~2台の車に乗り合わせて出掛ける拠点に成っている。此を何とか解決しないと一般の利用客(駐車、休憩、トイレ)が利用できなくなる、とのことであり、厳しく取り締まれ、との声もあるようだ。しかし駐車場の機能からすると、何台かで集まり、台数を減らして乗り合わせて行くのは至極当たり前の話で駐車場の持っている本来の大きな立派な機能の一つであり当然の帰結であろう。車の台数が減る事は重要なことであると思う。①経済的である②大気汚染対策に貢献している。③渋滞対策として最も有効である。④運転する員数が複数のため過労による事故が減少する事が想定できる。とざっと考えただけでも良いことづくめであ

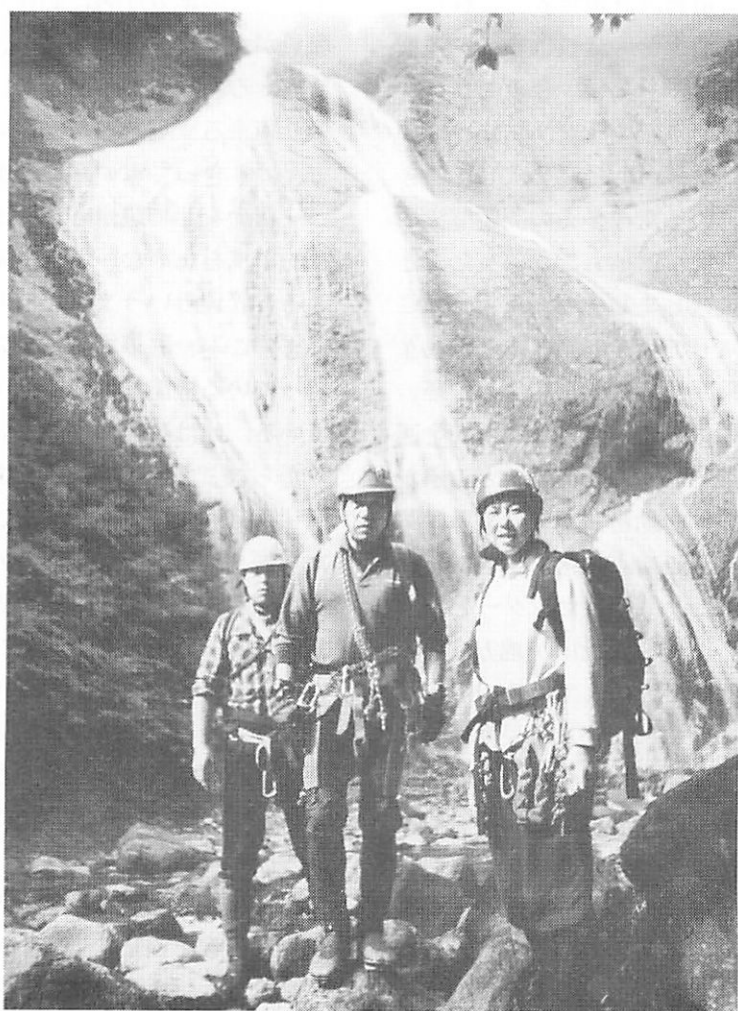
る。細かく上げれば利点はまだまだたくさんある。東京を中心として4～5千万人の人間がひしめき合っており、そこに何本も高速道路を放射状に造り其れをまあるく結んだ東京外郭環状道路を造るに当たって当然予測出来たはずの利用形態ではなかったのか、この程度の事が予測出来ないと言うなら日本の土木技術者、都市計画担当責任者、建設省道路設置担当者、これらに係わるその他大勢の議員はまさに穀潰し以外の何者でもない。今後こういった乗り継ぎ拠点を要所要所に作っていくよう国、県、市町村に要求していきましょう。いろんな多くの問題解決につながります、選挙もこういったことを考えて投票しましょう。下新倉はこのぐらいにして我々の話に成るが我々も又この乗り換え方式を利用し、経済、環境に気を使い渋滞対策と安全運転に心がけているので偉い。ところが話変わって私の勤務している某県の某地方庁舎は、この点非常に排他的でひどいところだ、某創造センターと言う訳のわからん名称の役所が地方庁舎の管理者と位置づけられている。駐車場の機能については、①車を長時間止めておける。②休める、用事、用件が足せる。③荷物、人の積み卸しがゆっくりに出来る。④車の乗り換えが出来る。と言う便利さにある、そしてこの地方庁舎の駐車場は某県のもの（地方自治体の資産）である、つまり県民の物と言うことだ、であればこの場所に係わる人でも、そうでない人も、一様に利用できるはずであるし、自分の車庫代

わりに何ヶ月も何年も利用すると言う非常識な利用でなければ、ましてや近所の市民県民が利用するのに不足があつてはいけないし、その人たちの利便を図るのが当然の業務であると思う。そ、れ、が、である。この某創造センターの所長が、管理者と言う意味を勘違いして近所の市民が、又県民がほんの1～2日停めても、ここの地方庁舎に勤務している職員がたまたま荷物を運ぶ、また乗り換える為駐車することも、自分を取り締まる立場なんだと思いこんで、はりきって車の写真を撮りナンバー紹介をして駐車している人に強圧的に車を止めないように通告している。管理という文字を取り締まりと思いこみ、駐車場としての本来持っている機能を埋没させてしまっている。此は公務員、役人によくありがちなことで、小役人がちょっと権利と言うか権限を持つと、此をやたら振り回したがる。コッパ役人のよく陥る初歩的なミスであるが、周りからしてみると大変迷惑で、非効率である。この所長を脅して圧力をかけこんなとんでもないことをやらせている偉張ることだけが仕事と思い込んでる悪の議員が居ることも忘れて成らないことです。人の振りみて我が振り直せ、の諺もありACC-J会員もこの轍を踏まないようせいぜい気を付けたいものである。とんでもない方に話が行ってしまいました大滝沢山行報告に戻ります、アプローチ、120kmの大滝以外は全部

登れる滝で、これらは全部美しいなめ滝です、大滝の巻き道も効率の良い巻き道ですがガイドブックで紹介されるだけの美しい、快適な沢です、おまけに下降も楽々下ったところが温泉、と言うことなしの良い沢でもいちど行ってもイイナーと思いますが、その時はビールとウイスキーとつまみを

しっかり持って、木村薫製本舗のニジマスと、もちろん本図冷やし中華も用意をして大宴会をやるべきでしょう。いつも本当にお世話になっていますこれからも【私を山につれてって】下さい、山以外な一んの楽しみもなくなってしまった爺さんなのですからね。

(名雪 記)



大滝沢 大滝前にて 大須賀、木村、渡辺

甲斐駒ヶ岳赤石沢奥壁Aフランケ赤蜘蛛ルート

2001. 8. 13

パーティーL本図一統、吉田 仁

お決まりのマイクロバスに、ゆらりゆられて、目指すは、北沢峠。毎度のことだけど、この寿司詰めのバスに乗っているとどこかに売っ飛ばされちゃう気持ちになるのは、僕だけかなあ〜。

どーでもいいけど、膝に乗せてるザックやたら重いんですけど！ま〜、今回は二人だけだからね、仕方ないか。そのやたらと重いザックを、背負って甲斐駒の頂上越えて八合目のベースに到着。本日は、これにて任務終了！まじめに降り口の偵察とかがして、まじめに早めに就寝しました。翌朝、まじめに早起きして、まじめに踏み痕を辿って、取付きに到着。がっ！しかし、すでに先行パーティーが、推定5組。そんなあ〜！仕方ないから煙草吹かしながら、先行の登りっぷりなんぞを眺めてました。ん〜、そおーとおー待ちそう…。隊長なんて、滑りそうな傾斜のあるところまで行って眺めてる。やばくないっすかあー、そこ。不安適中！先行さん、落としてくれました。しかし凄いですねえ「ラ〜ク」の声に条件反射！素早く岩陰のベストポジションをキープ！その動きは、まさに瞬間移動！敬服です。立っていたところに直撃でした。きな臭さあ〜い香りが、漂ってます。アハ……。そんなこんなで、やっとな僕達の順番が回って来まし

た。って言ってもビリッけだけどね！最初の人工を、隊長が行って、2ピッチ目から僕が行く。ジェードルに走るクラックを辿るんだけど、ジャミングは痛いから身体の振りで進む。登りは順調だけど1ピッチごとに1時間は待たされる。案の定、大テラスで時間切れ、おすわりビバークになってしまいました。夏真っ盛りとはいえ、この標高だとすっごく寒い。寝れないしやる事も無いので、片っ端からメールを送って暇つぶし。中には、今からあったかいお風呂に入って、あったかいお布団に入って寝ます。おやすみ……。なんて奴もいました。帰ったら殺ってやる！やっとな空が白々して来たところで待切れず早速登攀開始！すばらしいクラックを、人工で2ピッチ進む。高度感もバリバリで最高です！その先の2ピッチを、ハンガーノックと戦いながら突き進み無事完登！ピース！ピース！ピース！（古いよ）いやあ〜赤蜘蛛、濃かったっす！！

(吉田 記)



甲斐駒ヶ岳赤石沢奥壁中央稜

2001. 8. 15

パーティーL本図一統、吉田 仁

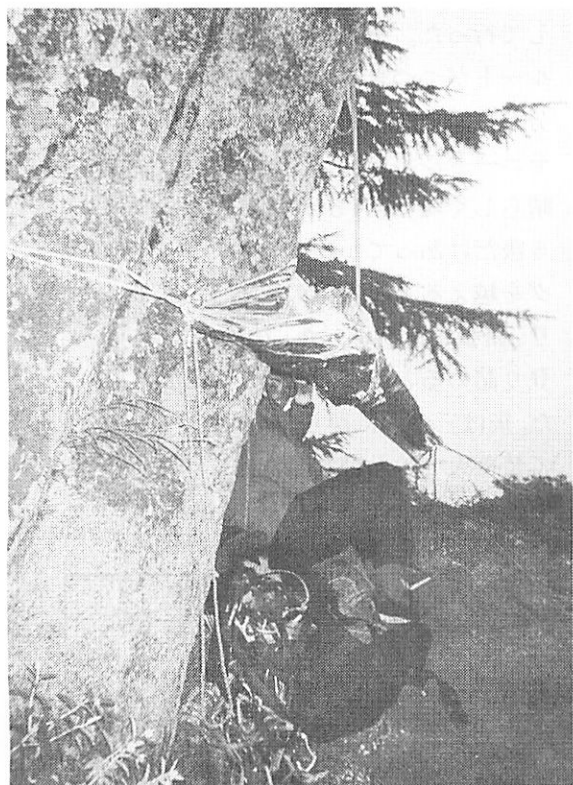
Aフランケ赤蜘蛛で予想外のビバークを強いられてしまった我々は、日数がなくなりBフランケを諦めて登攀最終日の今日、左ルンゼを登るべく第一バンドをトラバースする。しかし見上げる左ルンゼはビショビショで登る気になれない。それもそのはずだ。毎日午後になると雷雨があり、わけても昨日は大降りであったからだ。中央稜転進に決定する。隣にテントを張っている渓稜会のパーティーも、我々と同じく左ルンゼをあきらめて後続となった。中央稜には苦い思い出がある。入会して間もない21～2歳のとき、甲斐駒ヶ岳で夏合宿をやった。摩利支天方面の岩場を登り終えたので、いよいよ赤石沢奥壁に取付くことになった。私とNは左ルンゼ、OとSは中央稜に別れて取付いた。しかし1ピッチ目でOが転落し、運悪く取付にある岩に頭を強打し頭蓋骨骨折をしてしまったのである。その頃は現在みたいにヘリも飛ばず（気流が悪いからヘリは無理だと小屋のおやじに言われた）、救出に丸一日を要した。幸い後遺症も残さず全快したが、そのOが打ち付けた岩を見ると、それが昨日のことに思い出されてくるのだ。吉田リードで取付く。中央稜も濡れておりいやらしく感じる。吉田は慎重である。非常に良いことであるが、反面スピードがイマイ

チだ。しかしこれも経験を重ねることによって慎重かつスピードも速くなるだろう。これから期待できる逸材である。2ピッチ登ると草付きになる。それを登るとまた岩になり、吉田はルートファインディングに迷っているようだ。だいぶ時間をロスしたが結局それが正規ルートだった。次のピッチはクラックに沿って登るのだが、ここだけは快適なクライミングを楽しめた。はっきり言って、中央稜で“ドカイトキ！”と言えるのはこのピッチだけである。登攀終了後ブッシュ帯を登っていくと踏跡が左右に別れている。右のはっきりした踏跡を辿るとついにハマってしまう。悪そうな壁に踏跡は消えていたのだ。ある程度岩を登ってしまったので、ここを登るしかあるまい。吉田は再びフラットソールに履き替える。そのうち後続の渓稜パーティーもやってきた。ここは間違いで、先程の分岐を左に行った方が良いと教える。彼らは戻っていった。ハーケンも5本連打されており当然アンザイレンする。ここが中央稜の核心じゃねーの、てな冗談も出るほどだ。これを抜けると登山道だった。渓稜パーティーが再びやってきて、左の方はルートが判然としないという。彼らもロープをつけて我々の後に続いた。午後は昼寝しながら命の洗濯だ。山から降りれば又仕事が待っている。

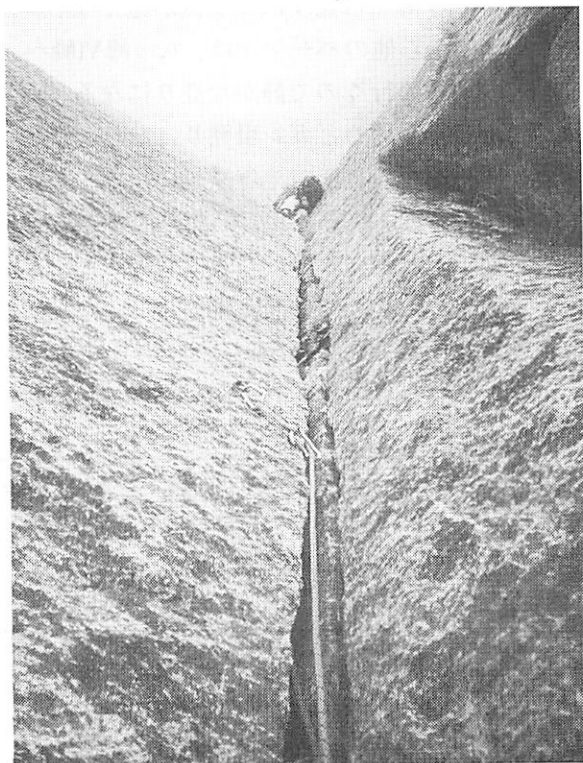
あっという間の5日間であった。今回の食当は吉田がやった。パスタ系を主食とした食事は俺は大好きだ。次回もまた吉田にお願いしよう。そうだなあ、俺はBフランケ赤蜘蛛と左ルンゼだったら又登りにきてもいいかなと思う。吉田は赤石沢はもうたくさんだと言う。岩に対する思い入れというか、好みは人によってだいぶ違うものなのだ。翌日は下山である。他のみなさんは日程に余裕があるらしく、下山するのは々だけだ。幕営地で一緒だった

パーティに挨拶して頂上に向かう。頂上ではブロッケンが見え、良い写真を撮ろうと30分位ねばり、10数枚撮影した。しかし現像してみると満足できるものはなかった。私はいままでブロッケンを5回見ているが、いずれも満足できる写真は撮れていない。私のカメラは所謂バカチョンだから、機械がピントを合わせられないのかもしれない。あとは2番バスに間に合うよう北沢峠向ってかけ下りた。

(本図 記)



甲斐駒ヶ岳赤石沢奥壁でのビバーク



甲斐駒ヶ岳赤石沢奥壁Aフランケ赤蜘蛛ルートを登る

北ア剣岳 チンネ左稜線

2001.8.14

パーティー L 笹平 孝、遠藤和彦、渡辺聡子、名雪博二 (ACC-J東京)

今回は、黒部ダムからハシゴ谷乗越経由で真砂沢出合へ向かった。ハシゴ谷乗越までの登りは暑さとの戦いで、来年の夏は沢登りに行こうと心に誓った。ハシゴ谷乗越にはブルーベリーの沢山あり、疲れた体にはちょうど良いデザートになる。真砂沢ロッジのテン場は、天然クーラーの雪渓から常に風が吹き降りて、震えるほど寒い。

翌日は、余計な荷物をテントに残して出発する。長次郎谷の登りは、池谷乗越までひたすら登りになり気が遠くなる。途中から他のパーティーは、ハッ峰VI峰へ向かって行くので静かな登りになる。熊の岩を過ぎるとガレ場登りになり、急な雪渓を登った所で池谷乗越に出る。ここから、あまり安定していない池谷ガリーを下ると、やっと三の窓に到着した。人気ルートなので渋滞は覚悟していたが、周りを見渡しても誰もいない貸切状態だった。今日は、中央チムニーの予定

だったが、順番待ちが無いという事で、左稜線に変更。とりあえず一番良さそうな場所にツェルトなどをデポして行く。どこが取り付きなのか探していると、奥に回り込んだ所の岩場にいた二人組みのパーティーも、取り付きを探していた。1ピッチ目は、ハーケンが少ないので、意外と緊張する。時間短縮のため、一気に2ピッチ目もロープを伸ばして行っただ。その後は、3級の快適なルートがつづき、岩も安定していて気分が良い。T5が近くなるとクレオパトラニードルが現れ、左稜線がとても素晴らしく映る。T5から核心になり、5級だけあつてかなり手強い。小ハングを越えると高度感のあるリッジになり、緊張する所だった。後は、リッジを登り詰めると終了点のチンネの頭に出た。後は三の窓に戻り、ツェルトを張って焚き火でのんびりした。

(笹平 記)

北ア剣岳 ハッ峰六峰Cフェイス剣綾会ルート

2001.8.15

パーティー L 笹平 孝、渡辺聡子、遠藤和彦、名雪博二 (ACC-J東京)

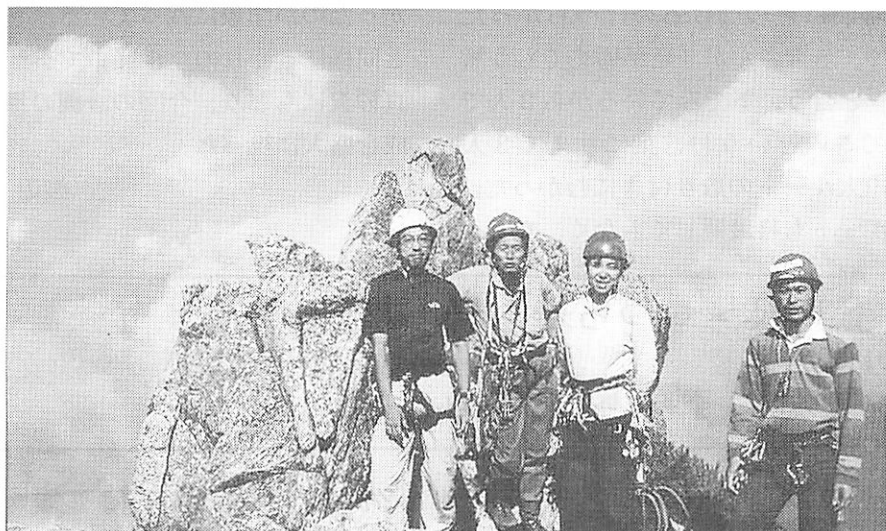
本日も登はん日和である。長次郎雪渓を黙々と歩くこと1時間強で取り付きに到着。AフェイスとDフェイスには既にとりついているパーティーがいたが、幸いにもCフェイスにはだれもいなかった。ゆつくりと準備をして、まずは名雪さんが登り出しロー

プをのぼしていく。ほどなくしてビレイ解除のコールがあり、すぐに登ってこいのコールがある。名雪さんはセルフビレイをとってから、フォローのビレイをセットするまでの間隔が非常に短く無駄な時間のロスがない。見習わなければならないと思うのだが、なかなか難し

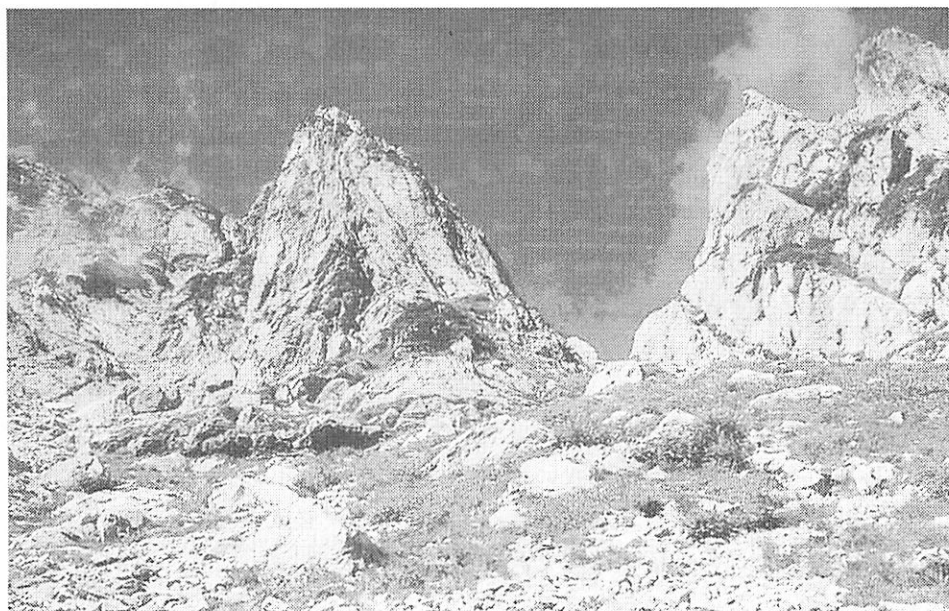
いものである。3ピッチ目まではお互いする
するとロープをのぼし、いよいよお楽しみの
水平トラバースである。不肖わたくしトップ
を行かせていただく。ホールドは全部がばが
ば、しかし足元がすっぱり切れていて怖い恐
い。このままCフェースの頭まで行ってしま
おうとしたのだが、ロープの流れが悪くなり

すぎてしまったのであきらめて途中でビ
レイし名雪さんにあがってきてもらう。
私たちがCフェースの頭に着くと間もな
くして笹平さん、遠藤さんも登ってきた。
しばらく雄大な景色を堪能した後に前日
の教訓を生かしてすんなり5、6のコル
にでる踏み後をたどった。

(渡辺 記)



チンネの頂にて 遠藤、名雪、渡辺、笹平



剣岳八ツ峰 5・6のコル 6峰Cフェース・Dフェース

北ア剣岳 八ツ峰Dフェース富山大ルート

2001.8.15

パーティー L 笹平 孝、渡辺聡子、遠藤和彦、名雪博二 (ACC-J東京)

剣稜会に続いて富山大ルートを登ろうと5、6の科尔からザックをデポしたところまでやってくると、やはりニンジャを長時間はきつづけるのはつらかったようで、名雪さんが「足が痛くてもう無理だ」と言う。下でみているから3人で行ってこいというお言葉に甘えて3人で富山大ルートの取り付きにむかった。このルートも特段難しくもなく、でもよ

いルートで、本日ふたつめの三ツ星をゲットした。ただ、5ピッチ目だったか狭いリッジなのにやたらにピンがなかったのが印象に残っている。さっきと同様に5、6の科尔経由でベースの真砂沢にもどり、今回の計画の無事達成を盛大に祝った。

(渡辺 記)

クドレ沢～つづら岩 岩トレ

2001.8.25

パーティー L 本図一統、渡辺聡子

今回は沢登り&岩トレと一度で二度おいしい山行である。前日の晩につづら岩のおりくちに本図モンキーをデポした後、入渓点そばで就寝。まずは仕事道を歩いて二俣まで行くのだが、この道がまたけもの道のようにはっきりせず、おまけに前に通ったのはいつなの？というくらいクモの巣があちらこちらにあって閉口した。沢に降りてもクモの巣攻撃はとどまらずえらい目にあった。肝心の沢はというとガイドブックには「秀逸な沢」と書いてあるようだが？？？である。滝は徳兵衛滝が一つあるのみで、直登はできないが右岸に簡単な巻き道がある。水が涸れる前に水筒に水をつめ、稜線にでて沢登りは終了となった。つづら岩まではハイキングコースをいくのだが、結構人

気がある場所とみえて多くの家族連れや単独のハイカーさん達とすれ違った。しばらく歩いていると道ばたにきのこを発見したので2人で道を外れて林に入ってみると紫色のきのこがわんさかと生えていた。前にもだまされた「これは食えるぜ！」というセリフに懲りもせず、きのこを袋に詰めまくる。この段階ですでに岩のぼりはなくてもいいや、という心境であった。結局つづら岩へ着いたのは何時頃だったろうか？2ピッチのルートを3本登ったところで雨が降りだしてきたので終了とした。1時間ほど道をくだり、なんとモンキーに2人乗りして車へもどった。こわかった

(渡辺 記)

穂高岳屏風岩東稜（怪しい中高年登山隊屏風岩を登る）

2001.9.7～9.9

パーティー L本図一統、木村 一、名雪博二、松原丈夫、高桑信一
(ACC-J東京) (浦和浪漫)

ACC-J 茨城の本図御大から屏風岩登攀の話が出たのは、昨年(2000)の11月に明星山の南壁を登攀した直後だった。浦和浪漫山岳会の高桑さんとの約束を果たす為とのことだが、屏風岩を一度も登攀した事が無い私は喜んで参加する事にした。その後、ACC-J東京の名雪さん・松原さんが参加する事になったが、メンバー全員が昭和24年以前に生まれた者ばかり。高桑さん曰く『私が最年少とは……………』と絶句したとの事。しかし、そこは海千山千の経験豊富な強者揃いなので屏風岩何するものぞ!!。久しぶりの人工登攀に向けて三ツ峠のゲレンデでアブミ登攀のトレーニングに励み、変な自信をつけて屏風岩の登攀に臨んだ。無雪期の上高地に来るのは20年振りだが目前には穂高連峰が当時のまま威風堂々とした姿で聳え立っていた。上高地から横尾に向かう我々の姿は、日本を代表する岩壁屏風岩を登攀するクライマーには程遠く、明神への道すがらキノコ採りに興じ、更に道々の売店でビールを飲む姿を他人の目から見ると、さながらオジサン5人連れのハイカーに見える事と思う。屏風岩登攀のベースとなる横尾に着く頃には、それまで我慢していた空からポツンポツンと雨粒が落ち始めてきた。天幕を張り終わる頃

には本降りになってしまったが2張の天幕の間にフライを張り、その下で昼間から恒例の宴会開始。飲む程に酔う程に昔の登攀話に花が咲き、仕事の話、?の話等、話題が尽きず至極の時がゆっくりと過ぎていった。事前の目論見では屏風岩の取り付けまで荷揚げをする予定であったがこの雨では戦意喪失なので、渡渉点の確認に本図さんが行くので一緒に出かける事にした。しかし、アルコールで酩酊している2人は足元がフラツキ、途中ですれ違った中年女性ハイカーグループの怪訝そうな目を気にしながら岩小屋跡に到着。翌朝の渡渉に備えて渡渉点にケルンで目印を積んで天幕に帰着後宴会第2幕開宴。夜の帳が降りる頃には空には星が瞬き、月明かりの中に屏風岩東稜のスカイラインが輝いており、明日の登攀成功を約束している。翌朝2時起床。3時半には青白い月明かりの静寂の中を5人のクライマーの力強い足音が屏風岩で垂直のダンスを舞いに横尾を旅立った。東の空が明るくなる頃にT4尾根の取付きに到着。ここで登攀準備を整えていると下から単独登攀者が駆け上がってきたので一言二言言葉を交わす。ハーネスを着けヘルメットを被ると心と体も登攀モードに切替わって行くのが感じられる。本図・木村・高桑と名雪・松原の2パーティーに分かれて登攀開始。1ピッチは取付から左

上気味に攀り途中のレッジで確保。
2ピッチ目は濡れたフェースをアブミを駆使して乗り越しブッシュ帯の手前でピッチを切る。更にブッシュ帯を抜けてT4着。T4からは草付き帯を下降気味にトラバースしてT2下の岩溝を登りT2に這い上がる。ここからが屏風岩東稜の登攀開始である。最初のピッチは人工登攀でフェースを直上、途中小ハングを乗越す。2ピッチは前傾気味のフェースをアブミ登攀で左上し、アブミビレーでピッチを終了。3ピッチ目はフリーで左上しバンドからは右上気味に攀り更に垂直のフェースを直上。このあたりはゾクゾクするような素晴らしい高度感である。夏を思わせるような日差しの中、気のおけない山仲間との登攀は最高の気分だ。ピナクルテラス手前のバンドで後続を待つのに小休止。上部は心地良い風が頬を流れて屏風岩の真中にある事を忘れてしまいそうだ。ピナクルテラスからは垂壁をアブミで直上して上部のリッペを右に乗り越して樹林帯の中へ、更に1ピッチ伸ばして登攀終了14:00。ここで後続パーティーを待つ間に登攀用具と屏風岩の思い出をザックに入れて、疲れた足取りで屏風の頭を目指して歩を進めた。ここからが今回の核心部とはこの時には誰が想像したことか!!屏風の頭の手前に小ピークがあり、ここから下って更に頭に登り返すのだが疲れた足取りには長い登りに感じるのは私1人ではないみたいだ。屏風の頭からは涸沢が一望に出来て景色の良い場所だ。涸沢の上部は若干紅葉が始まっているらし

くブッシュ帯が黄色く色付いているが、ザイテングラードの上部は厚い雲に覆われ明日の天候悪化の予兆か?。屏風の頭で小休止して更に歩を進めるが、北尾根最低コルから眺める涸沢ヒュッテの赤い屋根の遠い事。意を決してパノラマコースを涸沢に向けて下り始めたがやはり登山路は歩き易く整備されているので気が楽になる。どうもこのコースは山小屋への直行コースらしく途中から本谷橋へ向かうコースは見当たらない。バテバテになりながら涸沢ヒュッテに到着しここでビールで乾杯してその勢いで横尾まで下ろうということに決定。涸沢から下り始めて暫くはヘッドランプを出さずに下るが、程無く樹林帯に入る頃には回りはすっかり闇の中。ヘッドランプを点灯して歩いていると本谷橋手前の曲がり角に何か黒い動物が蹲っている様子。熊か?。思わず一歩後ずさりすると『おーいハジメちゃん』と呼ぶ声、松原社長が持っているヘッドランプの電池切れでしまい行動不能になってしまったらしい。ここは山男の友情で予備のヘッドランプの電池を快く差し出し、ここからは松原社長と同時行動を共にする。本谷橋の所で大休止するが、名雪さんはもう宴会モードらしく焼酎をガブガブ飲み闇の恐怖に打ち勝とうとしている。名雪さんにとっては行動食は流動食が一番との事。横尾谷への帰路岩小屋跡から右手を見上げると屏風岩の黒いシルエットが闇に浮かんで微笑んでいるように感じる。真っ暗な樹林

帯を過ぎ横尾橋の上に来ると、10組くらいの若いカップルが橋の上や川原に佇んでおり、ここは上高地と勘違いしてしまいそうな光景が広がっていた。心の中で『山男に騙されるなよ!!』と叫びながら天幕に帰り着いた。今宵は屏風岩の登攀成功を祝って盛大な祝宴開始。しかし、昨夜とは異なり呑む程に酔う程に睡魔が襲ってくるのは仕方が無いか……。1人2人とテントの中に消えていった。

翌朝、目が覚めると雨が降っており

昨日の好天が嘘のようであった。今日は下山するだけなので急ぐ必要はなく、ゆっくりとした朝の怠惰をむさぼって至極の時を過ごす。雨が小降りになった頃を見計らい天幕を撤収し上高地に向けて歩を進めるが、途中には山の恵みがあるのを入山時に見つけていたので、モタシ・ハナイグチ等の山の恵みを頂き、更に今回の山行のフィナーレとして、小梨平のキャンプ場で高桑シュフが茹で上げた蕎麦を昼食として頂き上高地を後にした。

(木村 記)

川内山塊 杉川

2001.9.22

パーティー L名雪博二、仲川敏幸 (ACC-J東京)、笹平 孝

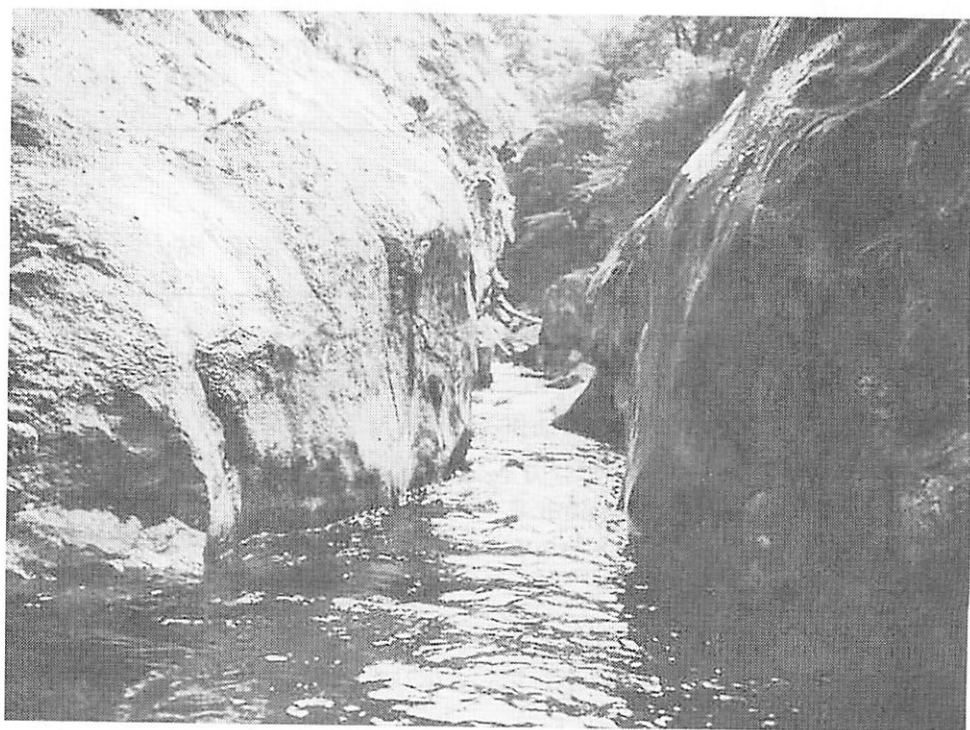
東京の名雪さんが杉川に行くと言ったので、迷わず参加させてもらう事になりました。車を止めた駐車場で、浦和浪漫の人達が準備をしていて仙見川に入ると言っていた。この先の行き止まりに車を置いて行く。今回、ヒル対策としてストッキングを2重に履き、そこへ塩を流し込んだ。登山道を歩くとすぐに東電小屋があり、この辺りからちらほらとヒルが現れ始めた。そして、この先にはミョウガの群生地帯があり、何個か採って行く。しばらく行くと、使えない吊橋のある逢塞沢を渡る。しだいに登山道も荒れてきて急斜面のトラバースがつづき、足にまとわり着く草で歩きにくい道だった。標高の低い山なのに、杉川は深い谷底を流れているのが良く分る。杉川の入渓地点に着き、

心配していたヒルのチェックでは、ヒルが足元に3匹付いている位で、何も被害はなくて良かった。沢に入るとゴルジュが続く、穏やかな流れで水深の深い淵が多い。足が着く程度の淵も結構あった。泳ぎ、高巻き、へつりの繰り返しでルートファインディングが楽しめる。ゴルジュも後半になると、体が冷えて震え出してくる。あまり水に浸かりたくないのも、へつりと左岸の高巻き道で行く。二本杉の手前で先行パーティーに追いついたが、二本杉のテン場は先行パーティーに譲る事になり諦めた。ここから20分程進んだ左岸には、広い河原と流木付きの良い場所があり、テン場はここに決める。名雪さんと仲川さんが釣り上げた岩魚の刺身と岩魚の味噌汁で、とても豪華

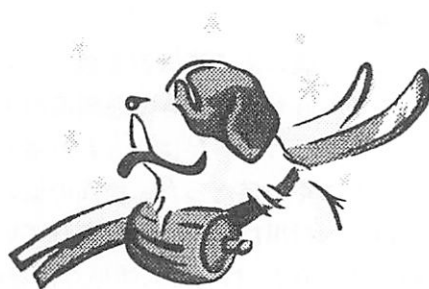
な夕飯になった。翌日は、少し早く起きてカンバナ沢出合いまで釣りをしながら進んで行く。始めて毛ばりを使って岩魚を釣る事が出来たので嬉しかった。早めにテン場へ戻り、岩魚を囲んで楽しく酒を飲んだ。最終日は、長いゴルジュの中をほとんど泳ぎながら下って行った。長時間水に浸かるので体

が震え出してくる度に、日の当たる場所で温まる。入渓地点に辿り着くと、やっと水から上がれるので一安心できる。後から降りてきた先行パーティは、さらに下って行った。駐車場に着いた時には、まだ戻ってなかったので登山道経由の方が早い。今回は、寒気が来ていたので厳しい杉川だった。

(笹平 記)



杉川 ゴルジュ帯



北ア唐沢岳幕岩大凹角ルート&広島ルート（大ハング）

2001.9.22～9.24

パーティー L本図一統、渡辺聡子

この報告はワタナベ文学方式で発表いたします。

第1幕（七倉）

目が覚めると天気はピーカンでやたら寒い。でもヤル気マンマンの二人は早起きした。あれ！タクシーがないじゃないか！登山者も少ないし～、そっか、よ～く考えれば今日は日曜日だ。普通の人たちは3連休だもんね。今日入山する人なんて少ないわけだ。タクシーや～い、どこだ～い、とその辺をウロウロする二人。看板を見てその理由がわかった。6時半にならないとゲートが開かないと書いてある。以前からそうだったんだっけかな？最近忘れっぽくなってきたのは歳のせいかな。タクシー乗り場にザックを置いて優先権を確保し、寒いので車に入り待つ。やがてタクシーが来たが、寒いのを我慢して並んでいた人たちに乗り込まれてしまった。ありや～りや！でもすぐに後から来たジャンボタクシーに乗れたので良かった。

第2幕（アプローチ）

唐沢入り口の地形が変わってしまい少し迷う。金時の滝上でナラタケ発見、帰りのおみやげにしようとそのまま保存。タクシーの運ちゃんが、入山者が少ないと言っていたが、今年は幕営地も混んでなく人がいない。結構なことではあるのだが、クライマーが

減ってしまい寂しさも感じる。でもさすが「大町の宿」は満杯で、前回利用した「神奈川の宿」を利用することにした。「神奈川の宿」の良さは焚火のできること。悪いところはラクの危険があることと、ちょっと暗いことである。テントを設営後、取付に向かう。ナラタケとスギヒラタケ発見。これは今日の肴だ。今の時期、ここにくればキノコが採れることは知っていたので、油、トウガラシ、塩、醤油、フライパンは持参してきた。昨日大凹角を登ったが、下降中ザイルの回収に失敗しビバークしたというパーティーがいた。今日取り付いているのは、山嶺第1とS字の2パーティーだけのようだ。

第3幕（登攀）

渡辺リードで登攀開始。今日は寒くて岩を持つ手が凍える。渡辺は怪鳥じゃなかった快調に登っていく。でも、あのでかいオシリはまさしく怪鳥と言ってよい。身長は俺と変わらないのに体重は俺より10キロ以上軽いという。ホントかな？

信じられな～い。つるべでバンバン飛ばす。いや、他にパーティーがいないのでノロノロ飛ばすと言ったほうが正しいか？難しいと感じるところは無く、以外に草付が目についた。支点はどちらかというと効いているほうである。渡辺登攀隊長が途中ちょっとルートミ

スする。岩を読むのではなく残置支点を追ってしまうからだ。ルートファインディングという技術は、フリークライミングをいくらやっても学べない。これを学ぶにはアルパインクライミングの経験を重ねるほかないのだ。あとは順調に終了となる。下降は右稜をラッペルする。

第4幕（幕営）

小さい焚火のはずが、マキがいくらでもあるので、当然いつものように大きな焚火になった。「神奈川の宿」の周りにはスギヒラタケがたくさんあった。採ったスギヒラタケとナラタケを炒めて酒宴の始まりだ。と、その瞬間、プ〜ンバシバシバシという音と共に機銃掃射を受けた。あわててヘルメットをかぶる。S字のパーティはまだ登攀中らしい。天気が悪くなるからと、げんをかついで、いつもは飲まない渡辺だが、今日の登攀に満足したのか、はたまたキノコ炒めが旨かったのか、ビールを少々飲んだようだった。明日は帰るだけだが、天気も良さそうだし、広島ルートのハングに登ることにした。夜更かししても良かったのだが、睡魔には勝てず9時ころには寝てしまった。

24日。第5幕（広島ルート）

渡辺が酒を飲んだのになぜか今日も好天。取付に行くのに一カ所悪いところがあり、フィックスもあるのだが慎重を期してロープを出す。広島ハングはさすがA3だけあってでかい。一つのハングとしては、おそらく私がいま

までに越してきたハングとしては、

1、2を争うほどの大きさではないだろうか。京都ルートのそれはさらにでかい。私は京都ルートでも良かったのだが、正直言ってどうせ渡辺は登れまいと考えていた。どちらがリードするか？と聞いたら「私がやります」という返事が返ってきた。ここで私はある提案を出した。「時間制限なしで渡辺がこのハングを完登できたら1万円払う。もしできなかったら1万円貰う」と。渡辺は少し考えていたが、結局このカケを断ってきた。さて渡辺は登り出した。あれ！上手いじゃん。なかなかスムーズで要領を得てるじゃん。なんの苦労もせずさっさと登り切ってしまった。う〜んまいったな。渡辺がこんなに上手くなっているとは。あ〜良かった、カケをしなくて。渡辺はしきりに残念がっていた。時間は45分、まあ80点の及第点をあげようか。渡辺曰く「広島ハングを見たとき登れる自信はあった」と。じゃあカケすればよかったのにねえ。登ってしまえば、どんな大口をたたかれても、私は「はいはい、そうですか」と聞いているほかなかった。でも奥鐘の京都ルートを登るには95点取ってくれなきゃだめだぜ。95点とるにはスピードのさらなるアップである。

第6幕（下山）

絶対忘れてはならない、お土産（きのこ）を採ることは登攀よりも大切だ。これが次回の山行ができるかどうかの分岐点になるからだ。カミさんに

「きのご採ってきたよ」と差し出すと、ニコッと笑って「あらよく採ってきたわね、じゃあ来週また行ってもらっちゃい」とくるわけだ。カミさんはキノコ大好き人間なのである。渡辺もキノコとなると目付きが変わる。いや、人間も変わる。ちょうど猛獣が餌を食っているところにライバルがくると、ウォーッと唸り声をあげて追っ払うが、それを彷彿とさせるのである。このキノコは何ですか、聞いてくるくせに、採っているところにうっかり近づきようものなら大変、咬みつかれるかもしれない。駐車場で恐る恐る渡辺に「山分けにしてください」とお願いしたら（といっても、そんなにたくさん採れたわけではないが）、以外にも「いいですよ」の声が返ってきた。帰りに風呂に入ることにした。渡辺は「どうせ入るなら日本秘湯の会の湯」だと言う。日本秘湯の会会員とは聞いて

たことないんだけど。彼女が言うことには、温泉に限らず、なんとか100名山とか、なんとか100名谷とか、選ばれた名所を踏破することは無類の楽しみなんだそう。その秘湯温泉に行くと入湯料600円であつた。私が501円以上の温泉には入らない主義であることは彼女はすでに知っている。難色を示す私に、な、なんと、超過分の100円を渡辺大先生が払って下さったのであつた。渡辺大先生は（100円払ってもらった途端、大先生呼ばわりする俺って、どうしてこんなにお調子者なんだろう）、この100円を回収するため、茨城まで高速を使わず、一般道で帰ってきたのでありました。うんうん、実はこの私も、この交通費を節約することには大賛成であつたのです。

（本図 記）



北ノ唐沢岳幕岩を登攀中の渡辺

《 友好山岳団体の月報、会報、その他 》

ありがとうございました

月報

◎Rohman NO.194 2001.7.B5 30P 浦和浪漫山岳会

徒渉訓練・利根川、南会津・倉谷川朝日沢・城郭沢、春の集中・日光・宿堂坊山集中・
坪川三重泉本沢・ニグ ラの尾根の頭・宿堂坊山、坪川三俣沢宿堂沢・宿堂坊山、柳
沢川三右衛門沢タキノイリ沢・坪川三左衛門 沢右俣・左俣・宿堂坊山ほか

◎Rohman NO.195 2001.8.B5 30P 浦和浪漫山岳会

南会津・大幽沢東ノ沢・丸山岳、川内夏合宿・広倉沢中退、ユウ沢Dルンゼ、Cルンゼ、ジッピほか

◎Rohman NO.196 2001.9.B5 22P 浦和浪漫山岳会

奥利根・楢俣川本流・南田代・水長沢中ノ沢・東ノ沢・大白沢アサユウ沢右俣・スス
ヶ峰・ススケ沢、南会津・

実川矢櫃沢・大丈田代、檜枝岐川下ノ沢・会津駒ヶ岳ほか

◎わらじ NO.544 2001.7 B5 28P わらじの仲間

春の集中・黒谷川、檜枝岐川、窓明山縦走、三ツ石尾根右稜・銅倉尾根、五竜白岳東
面二本松尾根、屋久島・宮之浦川・小楊子川、南会津・三岩岳ほか

◎わらじ NO.545 2001.8 B5 16P わらじの仲間

事故報告・末丈ガ岳、小川山、朝日金目左俣の3件ほか

◎わらじ NO.546 2001.9 B5 22P わらじの仲間

飯豊・大石川東俣川本流千代吉沢、胎内川楢木沢・二王子岳、韓国・千仏洞溪谷・白
雲溪谷ほか

◎逍遙 NO.122 2001.7 B5 23P 逍遙溪稜会

奥秩父・鶏冠谷左俣、大洞川和名倉沢、井戸沢、市ノ沢、奥多摩・南秋川ケムシ沢ほか

◎逍遙 NO.123 2001.8 B5 40P 逍遙溪稜会

虎毛・役内川三滝沢・赤湯俣・虎毛沢、奥秩父・鶏冠谷右俣、奥多摩・日原川小川谷
滝上谷、奥秩父・滝川豆 焼沢、奥多摩・水根沢、上越・東黒沢・ナルミズ沢ほか

◎逍遙 NO.124 2001.9 B5 20P 逍遙溪稜会

夏合宿・朝日・八久和川丸森沢・カクネ沢左俣・本流、出合川中俣沢、三面川岩井又
川畑沢、安達太良・石筵、

船形山・大倉川・笹木沢、那須・苦土川井戸沢、谷川・魚野川万太郎谷、南八甲田・逆
川本流、パッカイ沢、谷 川・湯桧曾川高倉沢左俣ほか

◎Next ! NO.67 2001.7 B5 16P 山岳溪流釣り集団むげん

奥秩父・入川・ヒダナ沢・雁坂峠、浅草岳・沼ノ平・大三本沢ほか

◎Next ! NO.68 2001.8 B5 20P 山岳溪流釣り集団むげん

志久見川、奥多摩・日原川小川谷滝谷、ミノコクリ沢ほか

◎Next ! NO.69 2001.9 B5 18P 山岳溪流釣り集団むげん

八幡平・葛根田葛根田・大深沢ほか

◎とまのかぜ NO.104 2001.7 B5 46P 童人トマの風

月山山スキー、栗駒・一ノ迫小桧沢スキー、麝香熊沢スキー、白馬大雪渓スキー、
尾瀬・片品川根羽沢大薙 沢左俣、船形山大倉川赤倉沢、大倉川鬼口沢蛇ヶ岳、荒
川北丸松保沢、矢櫃沢、大倉川矢尽沢左俣、餓鬼 岳〜燕岳、上信・赤石山湯ノ沢ガ
ラン沢、奥秩父・鶏冠谷左俣一ノ沢、蔵王・小屋ノ沢本流、天覧山岩トレほ か

◎とまのかぜ NO.105 2001.8 B5 60P 童人トマの風

奥多摩・クドレ沢右俣、弁慶・白玉川大禿沢〜カメクラ沢、小松ゾウ沢、奥秩父・金
山沢本谷、和名倉沢〜市 ノ沢、和賀・堀内沢辰巳又沢〜下天狗沢〜部名垂沢、川内・
早出川中杉沢、谷川・湯桧曾川高倉沢右俣、西ゼ ン、東ゼン、毛渡沢西俣、苗場・釜
川ヤド沢、焼石岳尿前川本沢、焼石・天竺沢、飯豊・長走川白滝沢、杉の沢 黒森沢、
荒沢岳・中ノ岐川灰ノ又沢、清津川・釜川右俣、飯豊・加治川ウジノ沢ほか

◎とまのかぜ NO.106 2001.9 B5 52P 童人トマの風

日高・ヌピナイ川、栗駒・一迫川相ノ沢、奥多摩・一之瀬川竜喰谷、奥鬼怒・オロオ
ソロシ沢、皆瀬川春川本 谷、朝日・三面川竹ノ沢中ノ俣沢、北ア・金木戸川小倉谷、
朝日・東大島川西ノ俣沢〜源太沢右俣、会越・叶 津川小三本沢〜浅草岳〜大三本沢、
八間山・魚ノ沢、飯豊・飯森山三河沢、会越・湯滝沢川幽ノ沢右俣〜左俣、 奥利根・楢
俣川ヘイズル沢、蔵王・八方沢、裏妙義・北烏帽子沢ほか

◎山紫水明 NO.74 2001.7 B5 4P 山旅の会

十二ヶ岳岩トレ、丹沢・勘七ノ沢、水無川本谷ほか

◎山紫水明 NO.75 2001.8 B5 15P 山旅の会

丹沢・モロクボ沢、源治郎沢、奥秩父・大常木谷、谷川・湯桧曾川本谷、日光・野門沢ほか

◎すずらん通信 NO.243 2001.7 B5 18P 鈴蘭山の会

燧ヶ岳、大杉岳、奥多摩・軍刀利沢、笹ミキ沢、北ア・柳又谷〜北又谷〜初雪山スキーほか

◎すずらん通信 NO.244 2001.8 B5 17P 鈴蘭山の会

奥多摩・小雲取谷、大雲取谷、足尾・庚申川笹ミキ沢、奥秩父・大荒川谷、滝川本流〜
八百谷〜曲沢、大洞川井 戸沢〜奥新左衛門窪左俣〜惣小屋沢、日光・緑沢ほか

◎すずらん通信 NO.245 2001.9 B5 25P 鈴蘭山の会

奥多摩・唐松谷、奥秩父・笛吹川東沢本流ホラノ貝ゴルジュ、丹沢・小川谷、朝日・
根子川横松沢右俣、南ア・
信濃俣河内、谷川・東黒茶ナルミズ沢、会津・中門沢、丹沢・原小屋沢、南ア・野呂川
扇沢ほか

◎溪游 NO.116 2001.8 B5 12P 溪游会

山陰・東山皆込谷、大峰・白川又川奥剣又谷、台高・小像川クラガリ股谷、北播・福
知川杉岡谷、台高・蓮川 宮ノ谷風折谷砥石谷〜池木屋山、丹波・由良川中ノ壺谷、
大峰・池郷川本谷、因但・須留ヶ峰大シデ谷ほか

会報

◎ADVENTURE forum NO.6 2001.7 A4 8P 植村記念財団

今井通子氏、渡辺佳苗氏の紹介記事ほか

以上閲覧したい方は本図まで

編集後記

会社で報告書等を作成するときに文章力が以前と比べて上がったなど感じる事があり、会報の原稿を書くことが会社の仕事にも役に立っていると思う。

『スキーは転んだ回数に比例して上手くなる』となにかの本で読んだ事がある。何事失敗を恐れては前に進む事はない。との気持ちで会報の編集に携わっています。

木村 一



印刷所：やさと印刷



岩壁、沢、冬山のクライミング集団